

博山の門流 (二)

長谷部 幽蹊

一、博山下の動向

元来の寂後、その門人のうち七人の主だった弟子達が各地に法幢を樹て、師の遺風を伝えようと努めた。元來が化導上の拠点とした信州博山には、智閑、道奉の後を承け、弘南、弘裕、弘喜等主としてこの一門の師僧達が住山した。元來の生地に近い廬江（安徽省廬江県）の治父寺には道雄を繼いで門下の南州月、笠庵蔭、松翁徠、天濟樾等の諸師遞住し、道密は淮南の檀度寺に化を布いたが、その門下は、淮西、淮南、淮陰方面に教線を發展せしめた。南のかた閩の地方についていえば、邵武や建陽、福州鼓山などが元來有縁の地であるが、広洲南海の出である道独は博山下において得法の後、福州長慶（福建省侯官県）を董し、雁湖に閑栖し、広東省に入つて広の羅浮、豊湖、粵の芥菴、海幢などに歴住し、閩粵の大刹に抛り博山の法門を開示した。

時あたかも明の末期に当り、新たに北方に起つた後金の圧力の前に明室は南遷を余儀なくされ、王侯貴族官僚や難民の

一部が、福建さらに広東方面へ移動したが、これと相前後して広東省方面に元來下の道独が縷の如き博山の道法の振起に力めた。道独門下では函呈、函可の二人が顕れている。祖心・函可は崇正禎十七年、広東に黃華庵を建てた後北上して遼陽の千山に至り、竜泉寺を中心に化を張つたが、法難に遭つて坐脱したと伝えられる。粵の地に江西、安徽を凌ぐ博山法門の隆盛をみたことについては同門の函呈の力に俟つところが大きい。蔣維喬氏は『中国仏教史』の中で「為博山第四世以後則不可考矣」といつているが道密下では淮西楚州洪福寺の靈燄燭は隠知聞を出だし、その桐城城授子山慈濟寺の侶石清には師席を繼いだ竺風聖と金陵靈谷寺に住した道揆守があり、王潛璞、祇園紹がともに靈谷に晋住して法灯を護持した。『諸家演派』によれば博山下十八世を称する徳風寿存が元來の郷里に近い池州銅陵蓮華峰に宗旨を建立したことが知られる。ただ演派が成つた時点において十八世ということであれば、寿存が生存したのは清朝も、末期に近い頃とみなされる

から、たとえその系統を明確に跡づけ得ないとしても近代まで存続した事実を証するに足るものといえよう。博山派は明末から清初にかけて嶺南地方に教線を伸展せしめたのであるが、博山に就学した大蔵道足(一六七〇)の如きはさらに西南の雲南雞足山蘭陀寺に開法したといわれている。

二、粵における博山派の発展

道独には前述の二人を含めて八人の弟子の存在が知られており、大部分が官僚の出身、乃至はその子弟であつた。丙丁戊(恐くは丙戌・丁亥・戊子、一六四六―四八年)以降、この地方に變事が頻発する多難な状況下において、道独下、函星の叢席は愈々盛んで、三教同源を説き、広い階層の支持を受け、縑素礼足数千人と称せられ、粵の地に博山派の禅を興隆せしめる上に主導的な役割を果たした。その門人として名を列ねている者の数は、優に六十名を超えるのであつて、例えば法諱の上一字に「今」字を有する者は四十名を算え、同様に「古」字を冠する者二十名を挙げることができる。函星の門弟には名卿鉅公やその縁に繋がる者、顯官として政治の枢機に参与した者から地方官署の卑官、儒官等の経歴を有する者、隠士、それに若干数の布衣が含まれているようであるが、大部分は士大夫階級に属した。一門にこのように多数の縉紳を擁したことは政変の時代とはいいながら、まさに異例の事であつたといわねばならない。

函星自身も番禺の望族の出身であり、且つて官途に志し、鄉薦に挙げられ、盛年孝廉の身分を抛つて出家した人である。彼の入道を聞いた人びとは、当初それを奇としたが、彼が詞林に開堂した壬午年(一六四二)から幾許もなく、世相騒然として鼎沸の状を呈した。この時に至つて、彼に先見の明があつたことが漸く人びとの話題になつたと伝えられている。

王朝が交替しても既存の権益の大部分は、そのまま安堵されるのが例であつたといえ、中には地位を追われ、職を奪われる者もあつたであろうし、自ら身を退くのを潔しとする高節の士もあつたに相違ない。激しい時世の推移を目の辺りにして、社会的な動揺とともに、各人が一沫の不安の念に駆られるのを禁じ得なかつたであろう。それと同時に現世的なものの空しさの自覺と、それに対する不信感も拭い去ることのできないものがあつたと考えられる。社会不安の募る中で、戊子年(一六四八)には桂王が江楚兩粵の兵に迎えられ肇慶府に至り駐し、庚寅年(一六五〇)には粵の地は争乱の渦中に巻き込まれた。こうした激動の時代に生きた且つての治者階級に属する政界の要人達がそれぞれの思惑を胸に秘めて函星の門を叩き、安心の方途について開示を求めたわけである。儒学が立命への願望に応え得ないとなれば仏門に趨る他はないであろう。

函星の門下は主に長慶、海幢、丹霞等、閩粵の名刹に分化

したが、道独以来、廬山もこの一門と係わりが深い。彼の弟子の中には今沼のように悔恨の念と自省の隱遁生活の中で静かに仏書を繙き、開眼発心した例もあれば、今釈のように進士に及第しながら、国が亡びて仏門に帰した者もあり、入道の機縁に政変の時期に特有な事例が見られる。彼等の出家の動機は求道の真情によるものであろうが、中には居士身のまま菩薩戒を受け、安名せられ、表向き仏門に帰した形で、それを保身的手段とした者も、名の知られている六十余名の彼の門人中、皆無であつたとは言い切れない。函星の会下の伝の考察は、危機的狀況に際会した人びとが、それに対処する振舞いの仕方を知る上に興味深く、また清代仏教の実態や性格を理解する上に好箇の資料を提供してくれるであらう。余集生や黃端伯の場合についてもいえることであるが、明末以降になると出家と在家との間に劃然と一線を引くことが困難になつてくる。それは特に非常事態の中で、中年以後の出家者が増えたことや、前歴に見るべきものがあり、知名度が高かつたような場合、出家後も寧ろ俗名で呼ばれることが多かつたというような事情にもよるのであらう。函星のように羅臘の存在が知られている例もあり、その点ではわが国の教団の現状に近いものがある。これがやがて近世中国仏教の居士仏教的性格のものとして受けつがれていつたとも見られるのである。

三、博山派における註疏の述作

中唐以降禪家では文字に著して固定觀念を生じ、またそれに伴う停滯化を打破する一法として看經を排し、經論の修習を否定するような極端な傾向が一部に見られたが、教禪一致の宋朝禪の後を承けた明朝禪では、講肆に遊んで經論を学び、別に師を求めて參禪し、諸方に歷參するというのが一般的な學道の形態であつた。従つて修禪、念仏などの実践と併行して、經典の評釈も行われたようである。元來の師惠經は廬山に參じ、金剛經を著して省あり、のち親しく金剛經の義を論じたという。博山も維摩經の拈提をしたことが知られ、同門の元賢は、楞嚴、金剛經の略疏を出だし、他にも多くの著作を遺している。元來は且つて『心經指南』を著して師に訶せられたというが、元賢に『般若心經指掌』が、函星には『般若心經論』の述作があり、弘贊は『般若心經添足』『般若心經貫義』を出だし、同門の弘麗の著として『般若心經開度』が伝えられている。これらは何れも博山の同門乃至その法孫であるが、その中で最も多くの著作を残しているのは清代の護法僧として名の高い弘贊に在る。弘贊の手になる註疏類は前掲の二点を含め、二十一種、九十卷以上の多数に上る。それらは何れも卅字統藏に収録されている。このように義學的な傾向が強くなつたのは独り博山一派だけに限られた事ではない。弘贊は教學に精通してただけでなく戒律にも明る

く、この方面に関する著作も少くない。戒学の修習を重んずるのも明末以降の禪に共通してみられる傾向であつた。

四、弘贊在慘(一六二一—一六八五)と戒学

明末清初における碩学の一人である弘贊の伝について、從來ほとんど知るところがなく、生歿年も確かでなく、また師承關係さえ定かでないのは甚だ奇異に感ぜられる。康熙己未年の撰述にかかる『六道集』には弘贊の識語が附せられているが、それによるとこの書は、師が將に七十才に垂んとする時点で公けにされたものであることが判る。いま仮に康熙十八年に、弘贊が六十九才であつたとすると、その生れは万曆辛亥年(一六一一)に当ることになる。そしてそれは陳垣氏の『疑年録』に引く寿柱庭鄧居士の詩の文から推測される生年、在世年次とも一致するからほぼ真違いのないところであると考えられる。『疑年録』は知られ得る生存年の最下限のみを記し、歿年については記するところがないが、七十五才で寂したとせられるから、示寂の年は一六八五年頃と推定されるのである。在慘(在操と表記されることもある)弘贊は広東省新会県朱氏の出で、陽江(肇慶府の南)において藏經(壇經ともいわれる)を閲して出家參学を志し、崇正の間、端州(嶺)に赴いた。その時高要県迪村の長者梁少川なる者が、神の夢告によつて寄捨したところの鼎湖山蓮花洞の一隅に精舎、蓮花庵を営んだ。鼎湖山は高要県東北四十里水坑都にある頂湖

山を指すと考えられる。この山は高さ数百仞、周百里で、一方の巨鎮とされている。『一統志』『通志』などは共に頂湖山のみを挙げているが頂も鼎も上声で迴韻に属し、鼎は呉音でチャウと読まれるようであるから音通と解せられる。古く黄帝が鼎を鑄造し、ここから竜に乗つて昇天したという伝説があり、それに因んで名づけられたという。山頂には深碧の竜潭があり、頂湖とも呼ばれた。弘贊は番禺県、白雲山麗の蒲澗寺に棲壑道邱を礼し、薤染受具し、棲壑を請して鼎湖に住せしめた。以後この山には学徒雲集し、名を改めて慶雲寺と称し、嶺南の名刹として知られるに至つた。寺は端州・游羚羊峽の陰、府治を去ること三十余里の地点にあつた。弘贊自身は棲壑を辞して北上し、雪関、餅寄、雲門、徑山、天童等の諸耆宿に歴參し、粵に還つて曹溪に謁したという。雪関とは博山の嗣智閑(一六〇五—一五七)のことであろうし、餅(瓶?) 寄は聞谷広印(一五六六—一六三六) 天童は円悟(一五六六—一六四一) 徑山は通容(一五九二—一六六〇)等の諸師が想定されるが定かではない。雲門は円澄(一五六一—一六二六)というよりその後雲門の法席を襲つた明雪乃至明孟を充て得よう。「謁曹溪」も何を意味するか明かでない。惠能の真身を拝したというのか。曹溪に住した誰かに謁したというのであろうか。憨山徳清は且つて曹溪に在つたが、弘贊の訪れた頃には既に化を遷していたと考えられる。次いで英徳西来山

に入つたが、山名に因んで西来尊者と呼ばれたようである。一六四三年に、同門の弘麗は、西来山白象林において弘賛がいち早く編輯を終えていたとみられる『四分律名義標釈』の校訂を行い、跋文を草しているから、この頃には弘麗と共に英徳に在つたもののようである。ただ弘賛は、その前後の一六三〇、一六五〇年撰の著作に広州大菩提沙門と記し、一六四二のそれには、鼎湖沙門と署しているから、鼎湖・広州の間を往来していたものとみえる。順治十四年には広州の羊城にあつた。その時近県の尼僧が来至して受具を求めたので二部僧を立し、受戒の者十人を満たせば爲に戒を授けたという。彼が棲壑の後を襲い鼎湖に住したのは師棲壑の寂した一六五八年の事である。ついで一六七〇年の前後には広州南海縣麻奢郷に宝象林を建ててこれに居り、その後一六七六年頃、再び鼎湖に住したようである。弘賛の受業、具戒の師である棲壑は徳清（一五四六—一六二三）雪浪（一五三五—一六〇七）家宗保（？）等の諸師に参じ、蓮池大師（一五三五—一六一五）より淨土法門並びに衣鉢を授けられ、また博山に久しく随侍した人であり、弘賛自身も博山の嗣智闇に就学しており、同門の弘麗との係わりからみても、博山派に深い繋りをもつていたことが知られるのである。

弘麗は羅峰大師と呼ばれ、名が知られている割には、弘賛同様、伝その他不明な点が多い。著作の序その他断片的な記

述を接合して考えると、その本貫は羅浮の近くらしく、師承關係は明かではないが、博山の一流に属するものであることは周知の事実であつたようである。その著作として、前掲の『般若心経開度』の他、『円覚經句釈正白』があり、高く評價されている。これが校較には弘賛も加わつていたのであるが、序によれば、彼が若年にして博山の嗣余大成に儒英をもつて執事し、器重せられたといい、師資の淵源自ら来ありと記されており、博山の嗣孫といわれているから、余集生道裕を通じて博山下の法を承けたと解せられる。当時広州に化を盛んにしていた道独の一門とも、王応華を介し交渉をもつたであろうし、弘賛とは法諱の上一字を共有するところから棲壑の門に遊んだとも考えられるが、『句釈』の署名のない頭序は「近有羅峰和尚句詮字釈」の文から推して弘麗の自序ではない。弘賛と弘麗は「心目一如」、至友とされており、「恨相見甚晚」の語は、弘賛の感懷を表わしたものと思われ、かつ「余得從而翻閱焉」とも述べられているからこの序は弘賛の手になるものと考えられる。とすれば、二人の出会いには比較的遅く、同源合派といつても師承を異にしていたとみなければならぬ。この一本は弘麗の土足、宗符が伝持した稿を新安帰戒の弟子通豁（江起竜）が捐貲梓行し、相ともに流通を助けたものである。これには応華の序が附せられ、それに丁酋中秋と于支のみ記されている。丁酋は一六五七か、一七

一七年かの何れかということになる。応華は東莞の人で、戊辰、進士に挙げられ、礼部侍郎の職を拝したが、道独に帰投し法名を函諸と称した。函是とは仏門の函季である。序には居士王応華とのみ署しているから出家以前の作であろう。順治十七年(一六六〇)に寂した道独、同門の函呈(一六〇八一六八五)との関連から、その進士及第を一六二八とし、丁酉を一六五七とするのが妥当である。これによれば弘麗の寂年は一六五七、乃至その前年頃と考えられる。

明の中期には律典を諳んずる者はすでに稀であつたというが、明末に至ると律の一家は殆んど地を掃うの状態であつたという。弘賛は受具してより後、律蔵を精究すること数年に及ぶもその宗趣を会得することができず、ために諸方を遍参するも、一として毗尼を学する者がなかつたと慨嘆している。彼は律こそ仏法の命脉であり、これあつてこそ仏法の存続が可能になると考え、律学の不振を昼夕悲傷し、法の久住を得ざるを慮つて自ら安んずるを得なかつたと述懐している。彼は三十四才の頃、天竺への渡航を思い立ち、梵僧数人に請ひ、来国して授戒の法を伝えんことを求め、戒灯の不絶を策したが、甲子春(一六四四)自ら閩に出で、ここより海に泛んで東天竺海隅、耽摩立底国(Tamralipti(現 Jamuk))に至り、さらに六十余駅可りにして中天竺那爛陀寺に到つたが、思いがけず時勢の大きな転換に遭遇して念願を果たし得なかつた。

この事は彼にとつて生涯の痛恨事であつたらしく、その後久しく自ら悔責して止まなかつたという。当時諸方の叢席で行われた授戒会は必ずしも仏制に遵拠したものではなかつたようである。こうした現状に対する不満が、彼を驅つて律学の修習に赴かせたのであり、その結果、十種、七十巻に上る多くの註疏を成さしめたのである。彼の渡天の事蹟は余り知られず、彼が律学の分野で果たした業績も、強ち正當に評價されているとはいえないが、彼を殊宏に次ぐ律学復興者の一人として推すことに躊躇の要はないと思うのである。

明代の禪を考える場合、戒学は蓋し看過し得ない重要な位置を占めている。元來の鷲湖参扣の意は主として戒学修習にあつたと解せられ、元賢もこれを重視したのであり、久しく元來に参じた道邱は鼎湖戒学の基礎を確立した。石洞元覺は棲壑を礼して円具し、崇範及び弘賛もこれに依止し、鼎湖は戒律の精嚴を以つて鳴り、海内これを宗としたと伝えられる。棲壑の後を承け鼎湖に継席した弘賛は上述の如く戒学をもつて知られ、師資唱和して鼎湖の戒学を、ひいては仏法の久住を計つた。衆人みな鼎湖の戒を以て重としたと賞揚される所以である。弘賛は博山の意図して果し得なかつたところを實現し、欠を補ひ、博山の法門を全からしめた者というべきであらう。(註記は紙面の都合で制愛させて頂きます)